

静岡のチョウ 世界のチョウ

2016.12.10-2017.3.26

～チョウがつなぐ自然の歴史 チョウがつむぐ生命の物語～



ふじのくに地球環境史ミュージアムでは、2017年3月26日まで開館以来初の企画展「静岡のチョウ 世界のチョウ」を開催しています。企画・展示を担当した岸本准教授に、企画展の見どころを案内してもらいました。

01 静岡のチョウ

日本にすむ約250種のチョウのうち、静岡にすむ全141種を展示している。

—静岡のチョウの下に並ぶ植物の標本は、チョウが食べる草木でしょうか？

そのとおりです。チョウの種ごとに餌植物が決まっています。ある地域にそのチョウがすんでいるというのは、餌植物があり、気候が適していて、天敵が少ないなど、様々な条件がその種にあっていうことです。また、長い歴史のなかで、その場所にたどりつき、現在まで生息続けたということを示しています。



—141種のチョウに141の生態環境と歴史があるんですね。

たとえば、このスジグロシロチョウの幼虫はワサビを食べます。伊豆半島や静岡市の有東木など、ワサビ田があるところには多く生息しています。

—静岡ならではのですね。岸本さんの一押しのチョウというどれですか？

このクモマツマキチョウです。

このチョウは、世界ではロシアやモンゴルからヨーロッパにかけて分布している北方系のチョウで、今回の展示でもスロバキアの標本を展示していますが、生息地の南限が静岡の南アルプスです。それぞれのチョウが、例えばわさび田、高山帯、里山、田畑、原生林など、それぞれに適したさまざまな環境をすみかとしているのです。



02 増えるチョウ消えるチョウ

人が作った環境で増えていくチョウがいる一方で、消えていくチョウがいる。

—「増えるチョウ」は、どうして増えていくのでしょうか？

原因の多くは「温暖化」が影響していると考えられます。熱帯アジアが本拠のチョウのなかで、どんどん北上するものがありますが、温暖化だけではなく、例えばナガサキアゲハはミカンの葉を、ツマグロヒョウモンはパンジーを餌としており、人が栽培する植物を食べるものが増えています。人間が農耕や園芸を行う空間で、繁殖し増えるチョウが増えています。



—すると、「消えるチョウ」は寒冷な環境のチョウが多いのでしょうか？

そのとおりです。たとえば、オオウラギンヒョウモン。東アジアの草原に広く分布する冷涼で乾燥気味の気候が本拠のチョウですが、1950年代に激減し、静岡県では1967年の伊東市大室山の記録を最後に姿を消しました。こうした消えたチョウたちは、日本では、かやぶきの屋根を作るため、牛馬の餌とするため、あるいは薪を取ったりするために管理していた草原や雑木林をすみかとするものがほとんどです。人の生活様式の変化の中で、消えてしまったものと考えられます。



03 世界のチョウ 南米や東南アジア、アフリカなど世界の珍チョウが集結。

—南米の、サンバダンサーのようなチョウとはすごい比喩ですね。

サンバダンサーのように色とりどりでしょう？(笑) 極彩色の密林の中では、黒いチョウよりも色彩が豊かなチョウが天敵に見つかりにくいのではないかと考えられますが、正確には不明です。

—珍しく、蛹(さなぎ)を展示しているこのチョウは何ですか？

アリノスジミです。非常に凶暴なアリの巣の中で頑丈な蛹を作り成虫になります。

—こちらの擬態のコーナーも面白いですね。

種が違う毒のあるチョウが生息地域内で同じような模様になっていく「ミュラー型擬態」と、アサギマダラに似せるカバシタアゲハのように、毒のないチョウが毒のあるチョウに擬態する「ベーツ型擬態」を紹介しています。



ミュラー型擬態 ベーツ型擬態

この他にも、チョウと見まごう美しいガや、文学や芸術の中で登場するチョウなど、1,400種6,000頭の静岡のチョウ世界のチョウが展示されています。

ふじのくに地球環境史ミュージアムは、今回の企画展で紹介したチョウの標本を含め、実に30万点を超える資料を収蔵しています。寄贈された標本は、ミュージアムと協働するNPO法人静岡県自然史博物館ネットワークにより、適切に整理・保管されています。今回のチョウ展では、NPO及び静岡昆虫同好会に所属する研究者が生涯をかけて収集したコレクションのうち、選りすぐりを展示しています。



企画展	「静岡のチョウ 世界のチョウ」
会期	2016年12月10日(土)～2017年3月26日(日)
観覧料	一般 600円 団体 500円 小学生以上大学生以下、70歳以上 300円
協力	東京大学総合研究博物館、静岡昆虫同好会、NPO法人静岡県自然史博物館ネットワーク

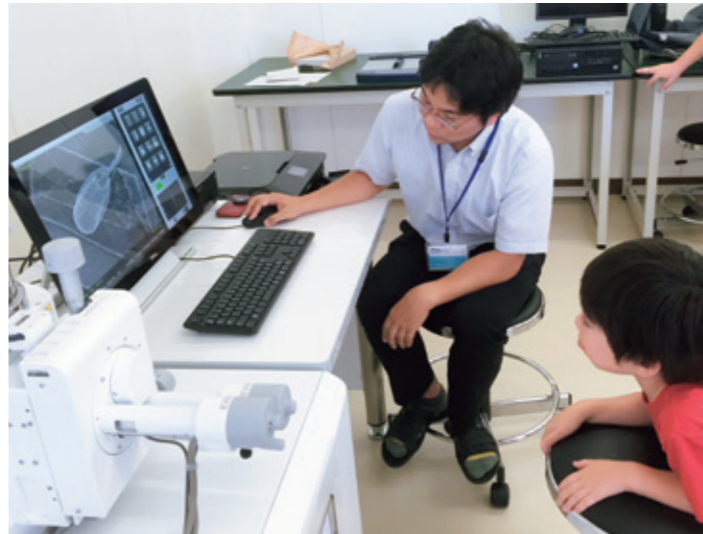
記念講演会
チョウを楽しむ
 2017年2月19日(日) 14:00～ 定員100名(先着順)
 養老孟司(解剖学者・東京大学名誉教授)、
 メレ山メレ子(プロガー・エッセイスト)
 ※講演会当日10時から、企画展チケット購入者を対象に整理券を配布します。

図録「静岡のチョウ 世界のチョウ」 販売価格 1,800円 フルカラー154ページ
 ミュージアムチケット売場にて好評販売中

MUSEUM DIARY

“ミュージアムのいま”をお伝えする、ミュージアムダイアリーです。

2016.7.17-8.31 サマーシーズン2016 & サマーナイトミュージアム



開館して初めて迎える夏休みは、「チョウの展翅体験」や「あなたの知らないミクロの世界」など、子どもの自由研究向けの体験イベントを開催しました。また、8月の土曜には夜間開館を行い、図鑑カフェでのコンサートや特別標本展示、夜の地球家族会議「星空と夜景」などを実施し、期間を通じて12,000人以上の方に御来館いただきました。

2016.10.1-2 ミュージアム合宿開催



静岡大学、静岡県立大学、静岡科学館・くるとの協働事業として、県内の理系進路選択を志す女子中高生を対象とした合宿を開催しました。ミュージアムでは、博物館の仕事体験や魚博士によるビーチコーミング、植物博士によるカレーライス講座(?)、などを通じて、リケジョの卵の中高生と研究者との交流を図りました。

2016.10.21 年報2015発行



2016年3月26日に開館したラストスパートミュージアムの、「大なる助走」を克明に記した2015年度の年報を発行しました。開館に至るまでの工事や展示製作の様子が、2012年度から4年間に渡りミュージアムに携わってきた小室桜子主査(現 磐田西高校教諭)のほか、6名の研究員によるエッセイなどが記されています。年報は、館内図鑑カフェやホームページで閲覧できます。

2016.10.25 秋篠宮同妃両殿下お成り



秋篠宮同妃両殿下がミュージアムを訪れ、常設展を御覧されました。各展示室では、館長をはじめ6人の研究員がそれぞれの展示室の見どころを両殿下に解説しました。

2016.11.3 DSA日本空間デザイン大賞受賞記念シンポジウム「博物館とデザイン」

日本空間デザイン協会が主催するDSA日本空間デザイン賞2016において、全785点の応募の中から、ふじのくに地球環境史ミュージアムの常設展示がグランプリである「大賞」を受賞しました。これを記念して、展示を監修した東京大学総合博物館特任教授の洪恒夫氏や展示施工の丹青社デザイナーを招き、シンポジウムを開催しました。デザインの観点から展示を見るガイドツアー等も併せて実施しました。

